

元新宮市職員の上野山巳喜彦さん（ごん）＝御浜町下巾木＝が、同市の自然災害や戦災の記録集「災害史誌」をまとめ、自費で一百冊発刊した。新宮市や近隣の自治体施設に寄贈することにしており「地域の歴史を共有し、現在を点検し、未来に備えたい」と思いを語る。

歴史共有未来に備え

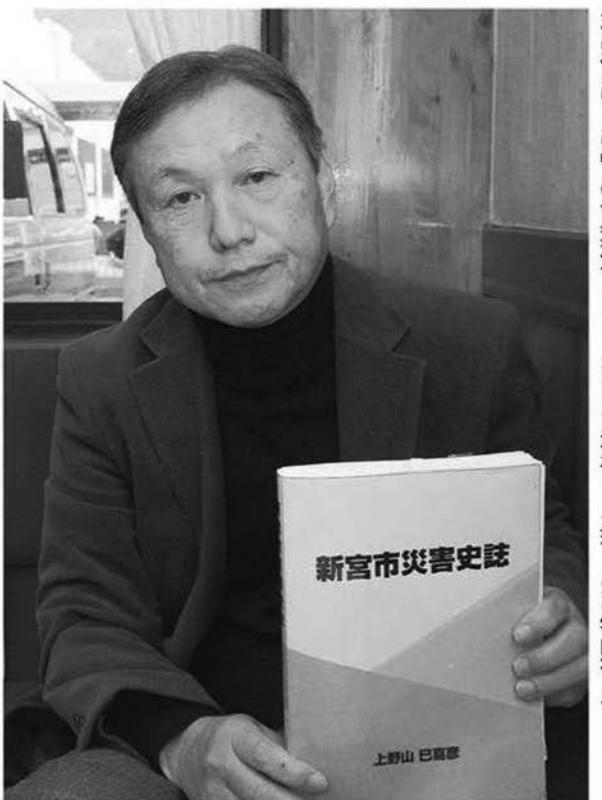
編集に向けた取材は退職後の二〇一三年四月に開始。長年にわたって防災を仕事として担当したこともあり、「防災を考えるには歴史を知らねばならないのに適切な資料がない」と、自ら足を運んで過去の出来事を調べることにした。

空襲を知る八十一歳の女忘れられないという。性の「どんなに貧乏して、もしいから戦争だけはこないでほしい」の言葉が、災害史誌はB5判四百二十八ページで、ブレイク・リューション社刊。「若

い人を意識して分かりやすく書いたつもり。過去の失敗は反省して改善し、良かった面は周知して拡大再生産していく。そんな防災対策を考える上で役立ててほしい」と期待する。

一般向けには非売とする考え方で、新宮市や熊野市、御浜町、紀宝町などの役所や消防、図書館などに寄贈する。

新宮「災害史誌」を出版



自著を手にする上野山さん＝熊野市で

過去二千年分の風水害、地震、大火、感染症、飢饉などの記録を、市史や古文書、手記、新聞などに当たって調査。中でも昭和と平成に力点を置き、昭和東南海地震（一九四四年）、新宮空襲（四五五年）、昭和南海地震（四六年）、紀伊半島豪雨（二〇一一年）について、体験者三百人に話を聞いた。新宮

地震や空襲など体験者取材

職員 市上野山さん